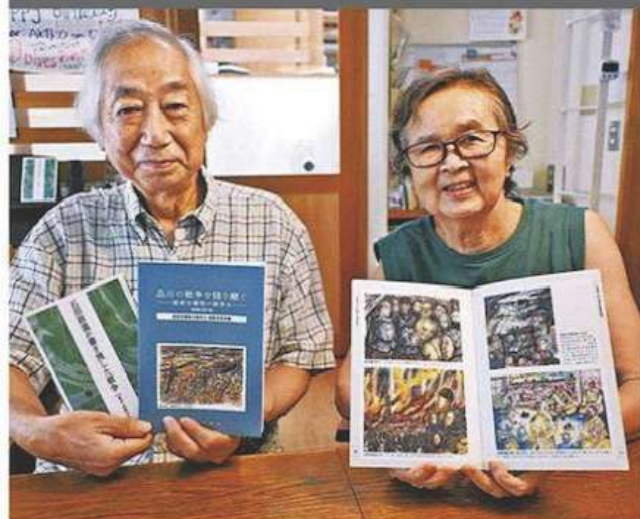


城南空襲を語り継ぐ会が「焼け跡歩き」出版



城南空襲の痕跡を紹介した冊子などを手にする西條明子さんと米屋陽一さん＝品川区で

81回目の終戦の日に合わせて、品川区の住民らでつくる「城南空襲を語り継ぐ会」が、平和をつないでいこうと冊子「品川の戦争を語り継ぐ 城南空襲焼け跡歩き」を出版した。焼夷弾で焼けた神社の神木など、地元の戦禍の「証人」たちを紹介。子どもたちに関心を持ってもらおうと、当時の子どもたちが通った国民学校の被災状況や体験者の描いた空襲の絵を載せている。

(飯田克志)

城南空襲は、太平洋戦争末期の1945(昭和20)年5月24日に現在の品川区など東京南部を襲った。体験者の証言を聞いてきた同会は、母親のおなかの中で空襲に遭った会員の米屋陽一さん(80)の「焼け残っている物、証言から分かる物をたどって歩いてみよう」という呼びかけで、2022年から昨年にかけて「焼け跡を歩く会」を6回開催した。

昨年、80年経過しても残っている戦争や空襲の証人を知ってもらおうと同書を試作。配布したところ好評を得て、今回増補改訂して600部を作った。

A5判、60ページ。巻頭に空襲で焼失した地域と、国民学校など

戦禍の品川「証人」たちを記録

「繰り返さないために知ることが大切」

をポイントした地図を付け、東京であった空襲と城南空襲について解説。区内の被害の状況一覧と年表もある。

6回の焼け跡歩きごとに、訪れた証人などの説明と写真、その場所が分かる地図を掲載。爆弾の破片で傷ができた墓石、天井に焼夷弾が突き抜けた痕跡が残る神社、1942年4月に荒川区や品川区などが爆撃された東京で初の空襲の犠牲者を弔う「殉職者之碑」などを紹介している。

空襲の絵は、13歳で空襲に遭った小島義一さん(故人)が「戦争だけは駄目」と描き続け、同会に寄贈した作品。防空壕の中でおびえる人たち、空襲や火災から逃げる小島さんの家族の姿など、戦争の悲惨さをありありと伝える11点を掲載した。

同会はこの冊子を区内の小学校に寄贈する予定で、代表の西條明子さん(80)は「戦争がひたひたと近づいているように感じる。繰り返さないために知ることが大切。身近な所に残る戦争の跡を知ってほしい」と話している。冊子をきっかけに埋もれた戦争関連の情報が再発見されることも期待する。価格は千円(郵送料別)。購入希望は専用フォーム＝QRコード＝から。冊子制作費の寄付も募っている。

つなぐ 2026年戦後81年

当時のすごろくや証言

「しながわ平和のための戦争展」が20～23日、品川区大井町駅近くの区民ギャラリー(大井1)で開かれる。冊子「品川の戦争を語り継ぐ 城南空襲焼け跡歩き」と、米屋さんの編集による知人の出征体験記「石田正温が書き残した戦争」(千円)も販売。同書は、19歳で召集された石田さん(故人)が戦地の中国で体験した「戦争の現実」がつ

20日から大井町で「戦争展」

づられている。

戦争展では「品川は焼け野原になった」「品川・荏原空襲の碑をつくろう」などの展示があり、教育勅語や兵隊を題材にした当時のすごろくもある。21日に戦争体験者の証言、22日には石田さんの体験記の朗読なども予定。入場無料。

(飯田克志)

戦争展で展示される、教育勅語を題材にしたすごろく

